
【フィールドワーク通信】 三重県菰野町の民話会「民話語り こもの菊」の活動

廣田 里咲（早稲田大学文学研究科文化人類学コース）

1. はじめに

特定非営利活動法人「全日本語りネットワーク」が主催する「全日本語りの祭り」が、2026年10月4日から6日にかけて、三重県菰野町で開催される。これは、2年ごとに開催される祭典であり、菰野町で第17回目を迎える。日本全国から菰野町に200人ほどの関係者が集まることが見込まれているため、おそらく開催地域の民話会では、通常よりも活動に熱が入るのではないかと考えられる。

祭典の開催地域である菰野町で活動する民話会の1つに、「民話語り こもの菊」という団体がある。この団体の存在を知ったのは2024年のことであったが、その頃から筆者は、「民話語り こもの菊」の活動に参加しながら、2026年度の祭典を間近で観察することを考えていた。菰野町における語り手とのフィールドワークでは、文字で記録されている民話を声にして語るまでのプロセス、そして語り手が学術知から受ける影響について明らかにしたいと考えている。

菰野町におけるフィールドワーク調査の背景には、修士課程在籍中に訪れていた山形県南陽市の民話会での調査内容と併せることで、現代における民話伝承や語りの実践をより多角的に検討したいという考えもある。全く異なる背景や活動内容を持つ民話会を知ることで、より良い民話会の将来的な在り方や、民話の継承の在り方を考察できると考えている。このフィールド通信では、来年度の語りの祭典に先立って実施した菰野町での調査内容をまとめ今後のフィールドワークに備えるための基盤づくりとしたい。

2. 三重県菰野町と「全日本語りの祭り」

三重県北勢部の内陸に位置する菰野町では、郷土史研究家によって民話伝承の基礎が作られており、近年では民話絵本コンクールが開かれるなど、菰野町をあげての民話伝承活動が活発になっている。そのような民話伝承の活動が評価されて、「全日本語りの祭り」が菰野町で開かれることにつながったと考えられる。

i 全日本語りの祭り in 菰野町

「はじめに」でも触れたように、菰野町では「全日本語りの祭り」が2026年10月4日から6日にかけて開催される。この祭典は2年ごとに開催されており、1992年に埼玉県秩父市で開かれた第1回目から始まり、菰野で第17回目になる（NPO法人全日本語りネットワーク「全日本語りの祭り」）。菰野町での「全日本語りの祭り」には、勿論、地元の民話会である「こもの菊」や「真菰の会」も関わるようになっており、菰野町に伝わる物語が語られる予定である。「全日本語りの祭り」は、語りの普及や、語り手たちの交流・情報交換、開催地での語り活動の活性化を目的としており、祭典中は日本と外国両方の昔話だけでなく、古典・創作・文学・パーソナルストーリーなど様々なジャンルの物語が語られる（同上）。菰野町の人々にとっては、地域に伝わる物語に触れると共に、他地域の多様な語りに触れることができる貴重な機会になるだろう。

この祭典に向けて、「テラプレーション平和の語り 2025 in 菰野～笑顔あふれる世界を願って～」が、2025年11月8日（土）に午前の部（10：00～）と午後の部（14：00～）とに分けて行われた²⁾。主催は「全日本語りの祭り」と同じ「NPO法人全日本語りネットワーク」であり、ネットワークの理事たちが語り手としてイベントに参加したため、「全日本語りの祭り」のプレイベントと位置付けてよいだろう。このイベントの後援として「菰野町」

と「菰野町教育委員会」という菰野町の公的機関が関わっており、協力団体として菰野町の民話会である「民話語り こもの菊」と「民話語り 真菰の会」という2つの団体が位置づけられている。当日は、午前・午後ともに、観客の出入りがありつつ、それぞれ60～70人ほどが訪れた。そのうち、子供の観客は10人ほどであった。子供が座れるように最前列にビニールシートを敷いており、特に紙芝居は近くで見ることができるため、子供もより楽しめたのではないかと思う。語り手側も、観客に語り掛けたり観客も参加する歌を歌ったりなど、観客へ働きかけをよく行っていたが、子供だけでなく、大人（多くは高齢者）の反応も非常に良かった。その後、こもの菊の人々に知人から寄せられた感想も好感触であり、盛況であったと言える。

ii 三重県菰野町全体における民話伝承の現状

菰野町における民話伝承の特徴をあげるとすると、菰野町で毎年開催される「菰野町手づくり民話絵本コンクール」と、郷土史研究家である佐々木一の存在の二つである。本フィールド通信では、これら二つの特徴について、現時点で明らかになって点についてまとめる。

まず、「菰野町手づくり民話絵本コンクール」は、「菰野町絵本の町づくり文化プロジェクト実行委員会」によって開催されている、菰野町に伝わる民話を題材に、絵本を作成するコンクールである。第1回は平成28年度に行われ、令和7年度で10回目を迎えた。ホームページ内の「過去のお題」というページには動画が掲載されており、お題となった物語を語り手が語る様子を視聴することができる。このコンクールのホームページに掲載された「趣旨」には、「親に絵本を読んでもらっている子には、『家族愛』が育まれます。『家族愛』と『郷土愛』に満ち溢れた子どもたちがいっぱいいる町にしたいと思っています」と記されている。ここから、運営側が民話を郷土愛の育成と強く結びつけて捉えていることがうかがえる。さらに同じ「趣旨」には、「菰野町に残っている民話を、子どもたちが楽しめる絵本に生まれ変わらせていただきます。おはなしの筋は、子どもたちが楽しめるように思い切って変更していただいて大丈夫です」とも書かれている。つまり、物語の変更があらかじめ許容されているのである。その理由として挙げられているのは、「子どもたちが楽しめるようにするため」であり、語り口や内容を現在の子どもたちに合わせて調整してよいという姿勢がはっきり示されている。このように見ると、菰野町では、民話を未来へつなぐための方法として、子どもたちが受け取りやすい形へ積極的に作り変えることが重視されていると言えるだろう。

次に、郷土史研究家の佐々木一とは、菰野町内の民俗や民話、歴史について研究していた人物である。佐々木一について、こもの菊の人々は、菰野町の民話について語る上では、佐々木先生は欠かせないと話していた。彼が菰野町の人々に話を聞いて巡って、文字にして残してくれたからこそ、菰野町の民話が残っており、語りの活動ができてきているからである。彼の著作集と言えるのが、『菰野百夜話』(1979)、『歴史こばなし』(1982)、『続・歴史こばなし』(1986)、『歴史こばなし第四集』(1992)、『歴史こばなし第五集』(1997)、『歴史こばなし第六集』(2003)、『歴史こばなし第七集』(2009)、『歴史こばなし最終集』(2017)の全8冊であり、菰野町図書館の2階にある地域資料コーナーに、各巻3冊ずつほど所蔵されている。この8冊の著作集は、昭和53年1月から「広報こもの」内で佐々木が計431回、36年間もの長きにわたり連載していた「歴史こばなし」をまとめたものである(石原2017)。

3. 民話語り こもの菊

筆者は、2024年11月6日に初めて「こもの菊」の語りを聞き、その後2025年3月2日の発表会、2025年8月27日、9月3日、10月1日、10月22日、11月5日、11月19日の例会、2025年11月8日に開催されたイベント(および7日の会場準備)に参加している。10日間で見聞きしたことは様々にあるが、このフィールド通信では、あまり個々の事例には深入りせず、こもの菊の基礎情報と印象に残った点について概観する。なお、以下に登場するこもの菊の人々の発言は、便宜上、鍵括弧で囲んでいる部分もあるが、実際の発言そのままではない。メモを元に、再構成したものである。

i こもの菊の活動

「民話会 こもの菊」は、三重県菰野町を中心に活動を行っている民話会であり、会員は、2025年時点で女性6名、男性2名の合計8名（筆者含めず）である。2025年で活動28年になるが、結成の契機は平成10年に公民館で開かれた民話教室であるようだ。その民話教室の卒業生が発表会を行い、これで終わりにするのも勿体ないということで、こもの菊が結成されたのである。こもの菊に所属する語り手が語る物語は日本の物語だけであり、菰野町や三重県の民話という制限はなく、落語も語る。

例会は、月におよそ3回、水曜日の9:00～12:00に行われている。場所は菰野町保健福祉センターけやき内で、部屋を1つ借りている¹⁾。例会は毎回、発声練習から始まり、「ばたから」と「だぞざど」という言葉を複数回繰り返す。発声練習が終わると、次は歌の練習が始まる。練習している歌は、筆者が参加した限りでは、「三重の数え歌」と「湯の山音頭」の2種類であった。この歌は、ボランティアで語りに行く（これを「出前」とこもの菊では言う）ときや、年に一度行われる語りの発表会で、民話を語る前に歌うことが多いようだ。歌を始めたきっかけは、語り手と聞き手双方の緊張をほぐすためであるようだ。歌の練習が終われば、話し合いへと進む。話し合いの内容は、基本的に「出前」に関するものであり、未来の出前に関しては出演者を決め、過去の出前に関しては振り返りが行われる。話し合いが一通り終わり、時間が余れば、語りの練習が行われることもある。例会は基本的に以上の流れで行われているが、月に1回は、先生を呼んでの語りの練習会が行われる。この先生は、県内の劇団で舞台監督を務めており、こもの菊に「語り」の先生として招かれている。筆者が修士課程でお話を聞いた山形県南陽市では「民俗学者」が先生と呼ばれていたことと比べると、状況が少し異なることがよくわかる。

例会以外の活動は、「出前」での語りが基本である。地域の小学校や、ケアセンターなど高齢者がいる施設、サロンなどから、依頼されて「出前」を行っているようだ。また、保健福祉センターけやき付近の広場にある足湯でも語りを行っている（これを「足湯ライブ」とこもの菊では言う）。足湯ライブは2024年から始めた活動であり、こもの菊の人々は、足湯周辺に集まる人々、普段は民話語りを聞かないような人々にも民話を聞いてもらうために、「押しかけている」と語っていた。

こもの菊単体での活動は、概ね以上のようなものである。菰野町内には、他にも「真菰の会」という民話会が存在しており、こもの菊と同じお話のイベントや「出前」に参加して語ることも多い。2026年の「全国語りの祭り」に向けて、2つの民話会は同じホスト地域の民話会であるとして、2024年からより活発に交流会を開いている。

ii 印象に残った例会内での議論

この項では、例会内で耳にした議論のうち、印象に残った議論を整理して、菰野町における民話伝承活動の状況を整理する。最も印象に残ったのは「盗賊と蜂」という物語に関する議論であり、焦点は大きく分けて2点に分類される。1つは「聞いただけでわかるかどうか」であり、もう1つは「現代の潮流に沿った表現であるかどうか」である。

まず1点目である「聞いただけでわかるかどうか」に関して、こもの菊の人々は、語りの中で、聞いてすぐに意味が理解できない表現があれば、変更を検討している。「盗賊と蜂」では、登場人物の台詞である「荷(に)に構うな」と、「いずこいずこ、おそしおそし」の2つが検討された。まず、「荷に構うな」という台詞は、主人公が山中で盗賊に襲われたときに、逃げながらお供の者に向けた言葉である。このうち、「荷(に)」という言葉が、聞き手にはすぐには理解されにくいと考えられた。「身に構うな」と聞こえることもあり、「荷(に)」という発音での表現はあまり身近ではないと考えられたため、「荷物に構うな」へ変更した方が、聞き手にわかりやすいという結論になった。次に、「いずこいずこ、おそしおそし」という台詞は、盗賊から逃げた主人公が、自分が世話をしている蜂を呼ぶために叫んだ言葉である。「どこだどこだ、遅い遅い」という意味であるが、この言葉も、聞いただけでは少しわかりにくいという意見が出た。この台詞に関する議論では、「音を大切にしたいなら、それでも良いと思うけれど」というような意見も出た。声にして語るため、音の楽しさや、語る側のこだわりは大切だ、ということである。しかし、それでも、聞き手に物語の内容を理解してもらいたいために、わかりやすさの方が重視される。この台詞に関しては、大人相手であれば伝わると思うが、子供相手ならば難しいと思われるため、言い換えた方が良いという

結論になった。

次に2点目である「現代の潮流に沿った表現であるかどうか」に関して、こもの菊の人々は、語りの中で、現代では問題であるとなされそうな表現があれば、変更を検討している。「盗賊と蜂」では、物語のクライマックスで、主人公に呼び寄せられた蜂が盗賊を退治する際の、盗賊が「刺し殺されてしまう」という表現が対象になった。この表現が、外部で語りをする際に問題視されることがあったからである。こもの菊の人々からは、「刺されて死ぬじゃなく、刺し殺すっていうところにドキッとした」、「刺されて死んでしまうなら何とも思わなかったと思うんですけど」という意見が出た。蜂によって刺された結果、盗賊が死んでしまうことには変わりはない。しかし、「刺し殺された」は蜂に明確な殺意があるように感じられるというのだ。人が死ぬのは当たり前なのだから、人の死を示すことではなく、殺意を示す表現が問題になる、というのが、議論における大方の人の受け取り方であったと思う。その一方で、作者にとってその“殺す”というイメージが大切だったのではないかと考えて、「そしたらそこは触らない方がええんちゃうか」という意見も出た。物語に登場する表現について、強い言葉を使うことが問題視される一方、それこそが物語の重要なイメージであるとして保存したいという意見も出たのである。この議論に関しては、「刺されて死んでしまった」という表現が無難だとしつつも、どれかが正しいと断言できるものでもなく、自分で納得した表現を使い、聞かれた場合には理由を説明できたら良いのではないかと、という結論に落ち着いた。

以上の議論の様子から、語り手たちは「どこまで変えてよいのか」という点について、二つの基準を行き来しながら考えているようである。すなわち、現在の聞き手に伝わるように工夫したい気持ちと、語り継がれてきた民話そのものの表現を尊重したい気持ちの両方を抱えながら、民話語りを行っていると考えられる。「聞いてわかるかどうか」と「現代の潮流に沿っているかどうか」については、どちらも「変えた方がよい」「変えなくてもよい」という両方の意見が出ていたが、その扱われ方にはわずかな差があるように筆者には感じられた。「聞いてわかるかどうか」が問題になれば変更されやすく、「現代の潮流に沿っているかどうか」は問題になっても変更されにくいように思われたのである³⁾。聞き手にすぐに理解されないのは問題であるために「聞いてわかるかどうか」という配慮は比較的強く働く一方で、「現代の潮流に沿っているかどうか」という点については、明らかな差別表現でもない限り、元々の語りの雰囲気や世界観を大切にしたいという思いが優先され、改変は慎重になる。

iii 「声」と「文字」という語の使用について

最後に、筆者自身の研究目的に関連して得られた語り手からの反応のうち、研究を進めるうえで重要な示唆を与えてくれたものについて述べたい。ここで取り上げるのは、筆者が用いている「声」という表現に対して寄せられた語り手の指摘である。筆者の研究目的の一つは、文字で記録された民話を実際に「語り」として声にされるまでの営みを明らかにすることであり、その過程を捉える語として「声」を用いてきた。しかし、この表現に対して、一人の語り手から次のような意見が寄せられた。『言葉』ではなくて『声』という表現を使っているのが、独特だと思った。自分は、小学校に語りをしに行くときに聞き方の説明をするのだけれども、その時は『言葉だけで伝えるから、想像してね』と言う。そこで『声だけで伝えるから、想像してね』と言っても、通じにくいかなと思う。』というものである。この反応は、筆者が当然の前提としてきた「声」という語の使い方に揺さぶりをかけるものであった。

筆者は、オング、W-J (1991)『声の文化と文字の文化』(桜井直文訳、藤原書店、原著は1982)を参照しつつ、「声」を文字との対比において捉え、口から発せられる表現を明確に指すための語として用いてきた。また、「言葉」という語では、文章で表す際、音声による表現なのか、文字による表現なのか曖昧さを含むため、その区別を明確にしたいという意図もあり「声」という語を用いた。しかし、実際に語りの場で「声」を使って活動している語り手が、この語の選択に違和感を抱いたという事実は、筆者の想定していた定義が必ずしも妥当ではなく、「声」という概念の枠組みについて再考すべき可能性を示している。語り手の実践に根ざした感覚と、筆者が参照する理論的枠組みとのあいだにどのような差異が存在するのかを、さらに丁寧に検討する必要があるだろう。今後は、語り手たちとの対話や、筆者自身が語り手として活動する経験を通して、「声」ひいては「文字」という語をどのような場面で用いるのがふさわしいのか、その概念的な基盤も含めて見直していきたい。

4. おわりに

菰野町には絵本コンクールがあり、地域に伝わる民話を広く普及させ、新しい形で継承しようとしている。菰野町全体として、民話を継承しようとする活動は活発だと言えるだろう。そしてその民話が途絶えることなく残っているのは、佐々木氏による記録がなされていたためである。

そして菰野町で活動する「民話語り こもの菊」は、小学校やサロンを始めとした地域のコミュニティからの依頼に応じた「出前」での語りを中心に活動している。語りの表現は「聞いてわかるかどうか」や「現代の潮流に沿っているかどうか」に応じて変化させようとしており、「聞いてわかるかどうか」という配慮は比較的強く働く一方で、「現代の潮流に沿っているかどうか」という点については、単に言葉の選び方だけの問題ではなく、民話というものをどのように受け継ぎ、どう守っていくかという思いも関わっている。今後は、こうした感覚の揺れが別の場面でどのように表れているのかを見ていくことで、語りの現場で起こっている調整や変容の在り方を、より丁寧にたどれるようになると考えられる。

筆者は、2026年に、こもの菊により積極的に参加する予定である。例会に参加し、筆者自身も語り手として語り、活動をすることで、三重県菰野町において、文字で記録されている民話を声にして語るまでにどのような営みが行われているか、そして民話研究者の影響をいかに受けているかを明らかにしたい。そして、修士課程で関わった民話会とは全く異なる背景や活動内容を持つ民話会を知ること、より良い将来の民話会の在り方、民話継承の在り方を考察していきたい。

註

- 1) この保健福祉センターの近くには、町役場と図書館、そして遊具や足湯（こもの菊の足湯ライブ場所）がある広場もあり、様々な年齢層の町民が集まりやすい空間である。高齢者、子供（およびその保護者）がアクセスしやすい場所で民話の活動をするには、民話会活動に良い効果をもたらしているのだろう。
- 2) 「テラプレーション」のイベントが始まる前に、司会はず、「テラプレーション」という言葉の説明から始めた。馴染みがない言葉だと考えたからであろう。「テラプレーション」とは、英語の“telling”と“celebration”を合わせて作られた言葉である。全日本語りネットワークは、11月をテラプレーションの月として、毎年イベントを行っているようだ。
- 3) この様子は、「盗賊と蜂」の表現における議論に続いて、「非常に今、コンプライアンスとかいろいろあるでしょう」と続いた雑談に近い掛け合いの中でも伺われた。概ね、「民話はそもそも結構残酷なもので、雀の舌を切ってしまう「舌切り雀」など、残酷な話もある。よっぽどの差別の言葉やったらストップかけられると思うけれど、それ以外の、誰かが死ぬとかの命に関わる言葉とかはもう、ある意味日常ではないか。よっぽどの差別の言葉は駄目だと思うが、現在は嫁という言葉も駄目というのを新聞か何かで見かけて、嫁という言葉を使えなければ、民話をどう語ればよいのか」という発言を聞くことができた。

参考文献

石原正敏

2017 「佐々木一『先生』の静かな使命感」『歴史こぼなし最終集』企画情報課編、三重県三重郡菰野町役場。

菰野町

2021年8月31日 “菰野町へのアクセス”。菰野町。 <https://www2.town.komono.mie.jp/www/contents/1568970087961/index.html>, (最終確認日：2025年11月13日)。

菰野町手づくり民話絵本コンクール

“過去のお題”。 https://www.komono-ehon.jp/theme_past.html, (最終確認日：2025年11月13日)。

“趣旨”。 <https://www.komono-ehon.jp/effect.html>, (最終確認日：2025年11月13日)。

“Home”。 <https://www.komono-ehon.jp/>, (最終確認日：2025年11月13日)。

NPO法人全日本語りネットワーク

“全日本語りの祭り”。 <https://japankatarinet.jp/information1.html>, (最終確認日：2025年11月13日)。